甲斐国の御牧「真衣野牧」の成立と展開

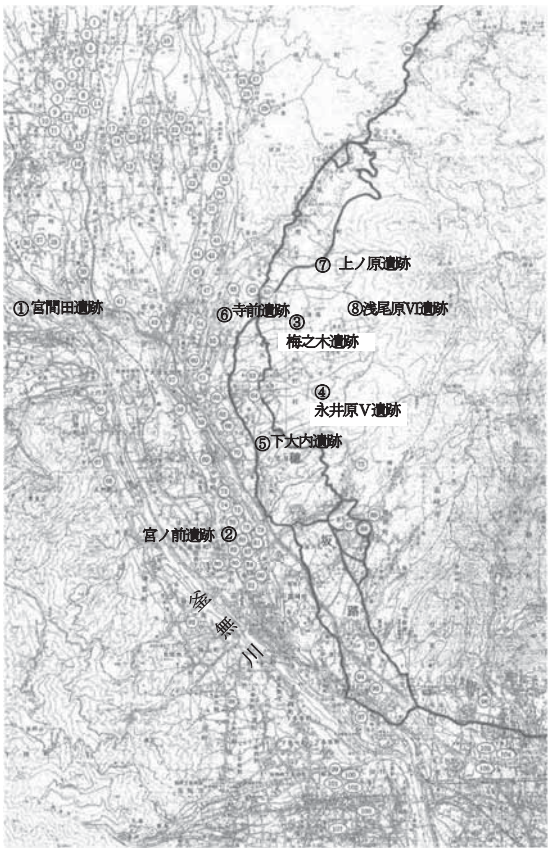
山中　章

はじめに

『延喜式』左右馬寮式御牧条によれば、御牧は東国に集中し、甲斐国３(真衣野牧、穂坂牧、柏崎牧)、武蔵国４、信濃国16、上野国９の合計32牧を設置していたという。日本古代の御牧に関する研究は、主に所在地比定を歴史地理学の地名分析に、制度研究を文献史学によって進められてきた。甲斐国御牧も同様で、その所在地は釜無川上流域の両岸に連続して設けられていたことが指摘されてきた。ところが1980年代から全国で進められた圃場整備事業や高速道路建設に伴う事前の発掘調査は、はからずも、牧のような広範囲を占有したと推定された施設の発見に大きな役割を果たした。甲斐国における最も象徴的な調査が、山梨県北巨摩郡武川村に所在した宮間田遺跡（第１図①）の発掘調査であった。

宮間田遺跡は釜無川右岸の低位河岸段丘上に位置し、西には鳳凰山の急峻な山塊が迫り、北や南には鳳凰山に源を発する大武川、小武川、黒沢川などの小河川が段丘を深く刻んで釜無川に流下した。東アジアにおける牧の立地としては典型的な地形に位置したのである[1]。歴史地理学的にも「牧野原」の地名が残り、甲斐国御牧の一つ真衣野牧の有力な比定地とされていた。1985年に開始された調査では、100基近くの竪穴住居址や複数の掘立柱建物が検出された。特に遺跡北部の丘陵裾部の住居址から「**牧**」と記された墨書土器が出土し、当該遺跡が真衣野牧の一角であることが決定的になった[2]。ただし、竪穴住居が牧のどのような機能を担っていたのか、遺跡そのものの機能はいかなるものであったのか、などについては依然として不明のままであった。

その後、左岸域で進められた発掘調査は、100件を超え、中でもこれまで大きな成果のなかった奈良・平安時代の遺跡を数多く検出した。焼印や皇朝十二銭等、馬制や官衙との関係を示す遺物が出土した。本稿は発掘調査の成果に基づいて、御牧である真衣野牧の成立から展開について考察するものである。(第１図)



第１図　釜無川流域の古代遺跡位置図（①宮間田②宮ノ前③梅之木④永井原Ⅴ⑤下大内⑥寺前⑦上ノ原⑧浅尾原Ⅵ）
注15③文献の図に加筆

1　宮間田遺跡の構造

(1)　住居分布の変遷（第２図）

遺跡から出土した竪穴住居址は 94 棟（内３棟は小鍛冶竪穴建物）である。土器を基にした編年と建物の所属時期は以下の通りである。

〈宮間田Ⅰ期[3]〉9 世紀第３四半期 ：第 74・84・87・89 号 住居址　〈4 基８％〉

〈宮間田Ⅱ期〉9 世紀第４四半期 第 10・15・19・35・40・56・61・64・68・71・ 72・ 78・ 80・82・83・85・86・90 号住居址　〈18 基 37%〉

〈宮間田Ⅲ期〉10 世紀第１四半期～第３四半期 第 17・18・29・32・38・50・52・55・62・66・67・80・88 号 住居址　〈13 基 27%〉

〈宮間田Ⅳ期〉10 世紀第４四半期：第 37・42・43・48・54・70 号住居址　〈6 基 12%〉

〈宮間田Ⅴ期〉11 世紀前半～11 世 紀後半:第 20・27・36・45・53・73・75 号住居址〈7 基 14%〉

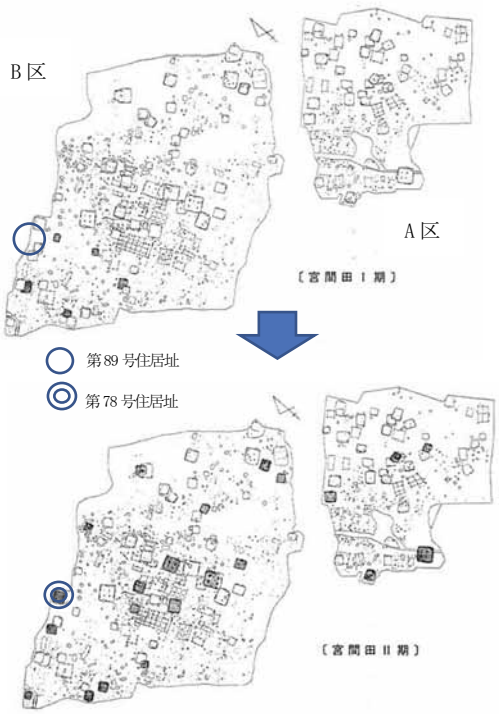
〈宮間田Ⅵ期〉12 世紀前半:第 9 号住居址〈1 基 2%〉　　合計　49 基

これによるとⅡ期とⅢ期で全体の 2／3 を占め、遺跡の盛期が当該期にあり、Ⅳ期以降急速に衰退することが判明する。また、住居の多寡に関係なく、Ⅱ・Ⅲ期では住居は調査区内に散在的に分布している。

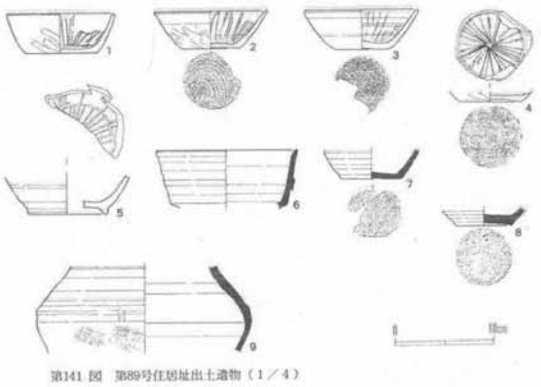
掘立柱建物の時期を特定することは困難であるが、Ⅱ期Ａ区中央付近に２棟の総柱建物が検出されており、当該期には遺跡中央付近に物品保管倉庫が設けられていた可能性が高い。

(2)　竪穴住居第 78 号住居址出土遺物

第Ⅱ期で注目されるのが第 78 号住居址である。



第２図　宮間田遺跡Ⅰ期・Ⅱ期建物分布（網のかかっている住居址が当該期のもの）第２～４図は注２文献の図を複写



第３図　宮間田遺跡第Ⅰ期第 89 号住居址出土遺物実測図

「牧」銘墨書土器を共伴し、遺跡の性格を決定づける資料とされた。（第４図３）

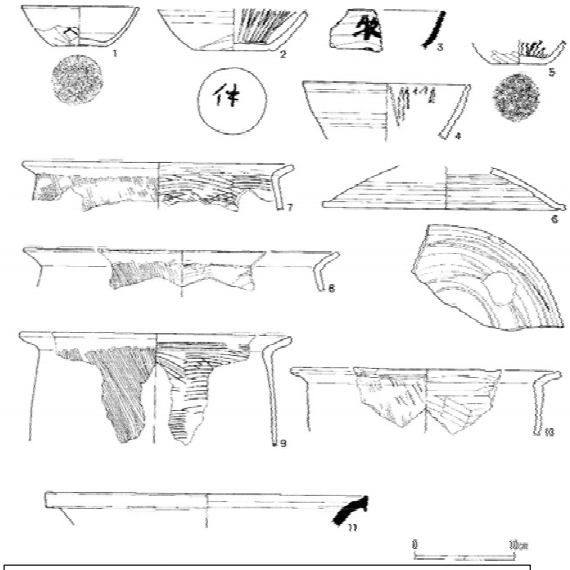
ところで、宮間田遺跡の初現は第Ⅰ期である。第 89 号住居址ほか３棟が遺跡の西辺部に固まって検出されている。共伴した遺物は甲斐型杯（第３図１〜4）や須恵器で、杯は典型的なⅠ期の特徴を示している。

これに続くのが第Ⅱ期で、一気に住居址が増加し、土器を共伴し年代推定可能なものだけでも全体の４割近くを占める。第 78 号住居址では大小の甲斐型杯 4 点と須恵器大型盤の蓋 1 点及び土師器甕 4 点が出土している。甲斐型杯２の底部外面にも墨書「伴」が認められる[4]。

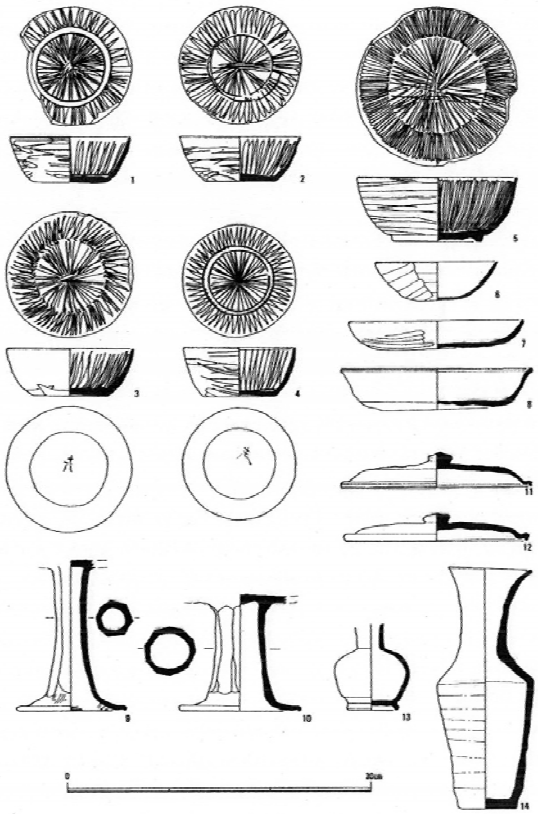
第Ⅲ期以降は第Ⅱ期と大きな変化はないが、次第にＢ区東へ移動していく点に違いが認められる。第Ⅳ期以降にはＡ区にほとんど住居址は認められなくなる。なお、左岸域では 10 世紀後半に入っても多様な「集落」が展開しており、右岸域と大きな違いを示す。

(3) 宮間田遺跡の実年代

甲斐型杯の実年代については、平城京左京での平城宮Ⅵ期に属する井戸からの出土[5]により大きく変更が迫られた。宮間田Ⅰ期に相当する甲斐型土器Ⅳ期が平城宮Ⅵ期、則ち桓武朝の土器と共伴していることが明らかとなり、実年代が一気に 780 年以降と 70 年近く上がることになった[6]。（第５図１〜5）

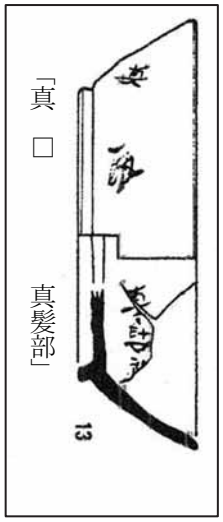


第４図　宮間田遺跡第Ⅱ期第 78 住居址出土遺物実測図



第５図　平城京左京二条四坊十一坪井戸 SE57 出土甲斐型杯実測図（注５文献を複写）

ところで、左京二条四坊十一坪内の井戸SE53出土墨書土器には、第６図のような墨書土器が共伴している(注５報告書35頁「墨書土器　13」の須恵器体部内外面に記された墨書)。これを再検討した清水みき氏[7]によれば、報告では「真□　真□□」(同34頁墨書土器一覧)とされている釈文は、「(外面) 真　□ (内面) **真髪部**」と判読できるという。



第６図　井戸 SE53 出土墨書土器実測図(注５文献図面に加筆)

真髪部は『続日本紀』延暦四 (785) 年五月丁酉の詔[8]により光仁天皇の諱「白壁」を避け、以後氏族の姓を「真髪部」と改めさせたものであり、この墨書は785年より以降に記載されたものと解釈すべきだという[9]。

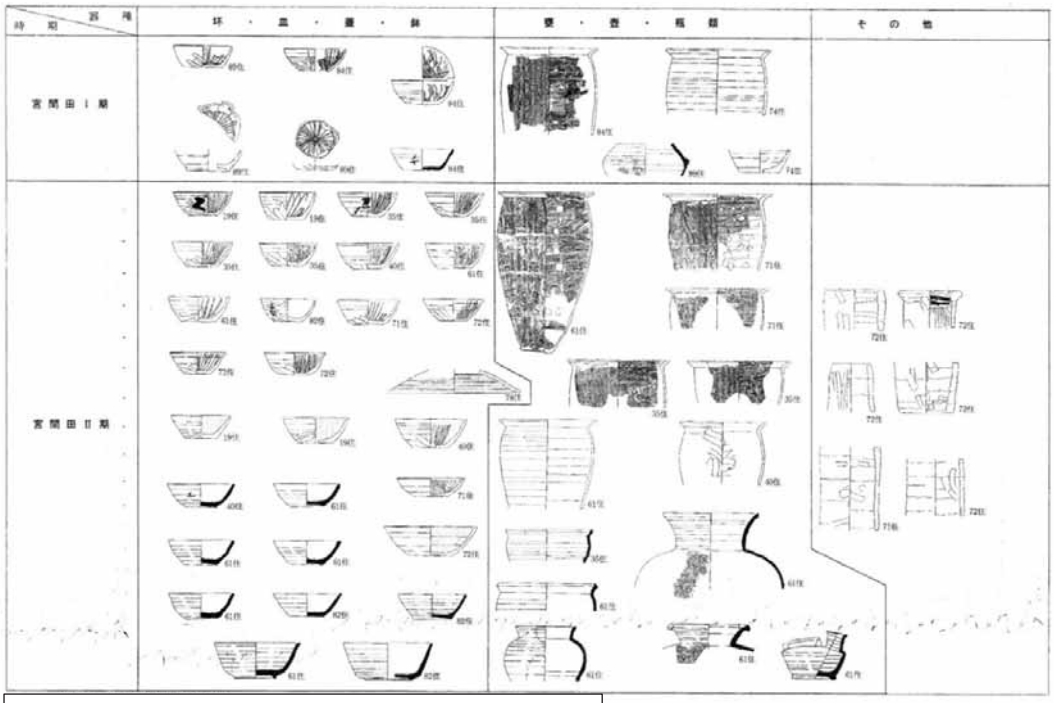
一方、『続日本後紀』承和二(835)年四月丙子条によると「甲斐國巨麻郡馬相野空閑地五百町賜一品式部卿葛原親王」と、「馬相野」の空閑地500町歩を葛原親王に与えたという。葛原親王は桓武天皇の皇子で、仁寿三 (853) 年に亡くなるまで、平城天皇以後文徳天皇までの歴代天皇の下、台閣の中心を担った人物である。馬相野[10] (まあいの) は真衣野 (まいの) に音が通じる。それ故この地が御牧となった折り、『延喜式』では「真衣野牧」と記載したと解釈される。

承和二年は、修正された甲斐型杯の編年ではⅦ～Ⅷ期にあたり、宮間田Ⅱ～Ⅲ期に相当する。「牧」墨書土器は宮間田Ⅱ期とされ、葛原親王が馬相野の地を与えられた年代とほぼ一致する。すなわち、報告書段階では指摘されていない葛原親王への下賜年代と、宮間田遺跡第Ⅱ期の成立＝「牧」が一致することになる[11]。仮称「馬相野牧」がいつ御牧・真衣野牧となるかを示す史料はないが、葛原親王が亡くなる仁寿三年をさほど下らない時期となろうか[12]。その時期は甲斐型杯新編年のⅨ期、宮間田遺跡第Ⅲ期に相当し、宮間田遺跡の規模と内実が維持されている時期である。宮間田遺跡から竪穴住居址が消えるのが第Ⅵ期で、甲斐型杯が消える11世紀以降と推定できる。

(4) 宮間田遺跡の機能

すでにみたとおり、宮間田遺跡を構成する遺構群は竪穴住居址群94基と掘立柱建物群45棟で、一部小鍛冶遺構を伴う竪穴住居址が3棟確認できる。掘立柱建物には少なくとも2棟の総柱建物があり、倉庫として利用されたと解釈できる。

500町歩 (約2.2㎢メートル四方) という広大な土地が御牧へと転換する基盤となったと推定すると、宮間田遺跡の遺構群は、牧全体の北西部に集中していたことになる。遺跡の南端は釜無川の氾濫原で、現在は6~８mの比高がある。建物群の背後 (西) には鳳凰山の山塊が迫っており、南辺と北辺には大武川や黒沢川が急峻な河岸をなす。馬の放牧場としては理想的な地形をなしており、宮間田遺跡の第一の機能が放牧にあったことは間違いなかろう。調査区の北西部に竪穴住居址や掘立柱建物が配置され、南東部には広大な空間がある。建物群は馬を飼育、管理するために配属された牧子 (馬子) たちの生活施設とみるべきであろう。２棟ある総柱建物を含めて当該遺跡が牧における第一義的である放牧による飼育、管理空



第７図　宮間田遺跡Ⅰ～Ⅱ期土器編年図（注２文献より転載）

間であると考えることができる。

ところが、当該遺跡は馬生産に欠かせない諸々の鉄製品を生産、供給する施設を欠いている。これらはどのように確保されたのであろうか。そこで次章では、対岸を含む周辺に目を転じ、以下、左岸域の遺跡の概要と、その機能を量る特徴的事項を述べてみたい。

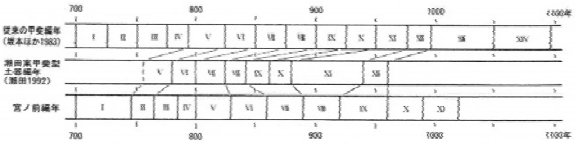
２　宮間田遺跡周辺の遺跡と機能

(1)　宮ノ前遺跡の特徴

宮間田遺跡に最も近い大規模な遺跡が宮ノ前遺跡（第１図②）である。塩川右岸の河岸段丘上、七里岩との間に挟まれた藤井平と総称される平坦地に立地している。発掘調査[13]の結果、426 基の竪穴住居址と 54 棟の掘立柱建物が 8 世紀前半から 11 世紀前半にかけて営まれたとする。塩川の対岸（南東部）には「穂坂」の地名が残り、御牧穂坂牧の推定地である。

設置時期の推定可能な遺構では、竪穴住居址は 349 基あり、初現の第Ⅰ期（8 世紀前半）に既に居住が開始されており、宮間田遺跡第Ⅰ期に並行する宮ノ前遺跡第Ⅳ期には 18 基、「牧」墨書土器の出土した宮間田遺跡第Ⅱ期に並行する第Ⅴ期（9 世紀前半）には 24 基と増加し始め、ピークの第Ⅸ期（10 世紀後半から

末）には最多の 109 基にまで増加する。ところがⅩ期（11 世紀前半）に入ると 7 基と一気に減少し、当該地での居住者はⅪ期以降消えていく。こうした遺跡の居住状況は、多様な文献史料にみられる穂坂牧の駒牽[14]とおおよそ重なってくる可能性があり、当該遺跡と穂坂牧での馬生産との関係については今後の課題としたい。



第８図　甲斐型杯の編年比較（注 13 文献を複写）

(2) 梅之木遺跡[15]（第 1 図③）の鍛冶工房群と墨書土器

釜無川左岸域、塩川流域（左岸）に所在する梅之木遺跡からもまた、多数の竪穴住居址や掘立柱建物が検出されている。特に注目すべきは、甲斐型杯を中心とした食器類に多彩な墨書が施されている点である。そこで以下、墨書土器の種類毎、時期別の分布状況から、遺跡の特徴を確認することにする[16]。

まず、遺構と文字との関係で注目されるのが「梶」銘墨書土器である。全体で 18 点出土し、第Ⅷ期が 7 点、第Ⅸ期が 11 点ある。鍛冶遺構と思われる施設を伴う 21 号、22 号住居から 10 点（□梶カとされるものを含む。以下同じ）と、まとまって出土しているほか、鍛冶関連遺構や遺物の確認はないが、近接する第 20 号、第 24 号、第 85 竪穴住居址からも出土している。W2 区中央から西寄りに「梶」銘墨書土器が集中するのである。「梶」（かじの音が「鍛冶」に通じ）が鍛冶集団の固有名詞と関係深いことが推測される。

最も多い文字は「真」（刻書「真」4 点を含む）で、総数 35 点ある。「真」文字の第一の特徴は、Ⅶ～Ⅹ期（墨書される土器の全期間）を通じて確認できることである。さらに調査区全体から満遍なく出土する傾向は、遺跡全体に共通して用いられた文字であることを示唆している。真衣野牧の省略形「真」を表記したのではないかと推測した。対岸の宮間田遺跡が真衣野牧の放牧地であったとの分析が正しいとすると、梅之木遺跡では鍛冶工房を設けて、馬の飼育、管理に必要な鉄製品を生産していたことになる。

次いで多いのが「田」墨書で、31 点出土している（刻書「田」2 点を含む）。「田」もまたⅦ期からⅨ期まで確認できる。出土住居址に偏りは認められないが、比較的 W2 区東部の住居址から出土し、前述の「梶」とは東西の対称地区からまとまって出土している。この地区の居住者は、グループを象徴する文字として「田」を採用したのではなかろうか。「真」、「田」、「梶」で墨書土器総数（210 点）の 40%を占める。

同一文字を 2 点以上記載する墨書土器はこのほかに、奉（11 点）、人（10 点）仁（8 点[17]）、乙（7 点）、矢（6 点）、源（4 点）、酒（3 点）、丸（3 点）、丸・万（2 点）、山（2 点）、浄（2 点）がある（58 点 28%）。これ等の文字の多くは、職掌や人名、小グループなどを記していた可能性があるが、未詳。

牧と関係深い遺物に、焼印が W2 区東端の 74 号土坑から出土している。全長 20.3cm、 最大幅 2.9cm、軸部厚 0.5cm、 重さ 37g あり、現存する印面寸法は、3.2cm× 1.2cm を測る。印面に表現された文字は判

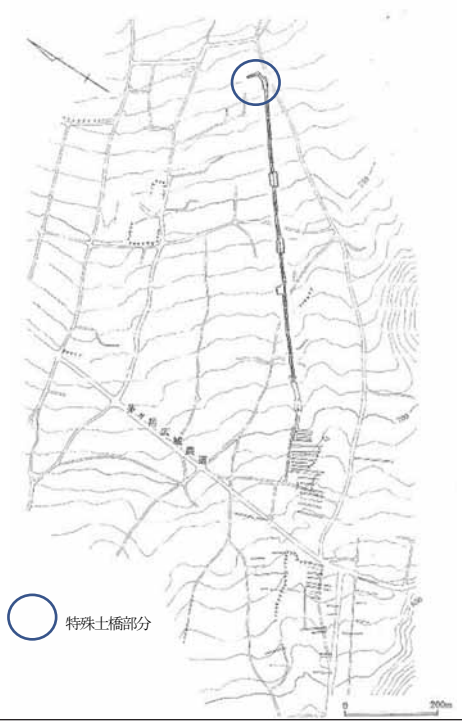
読できない。印面と思われる部分から軸部先端までに断片的な木質付着痕が認められる。特に軸部先端から7.5cm部分までに木質付着痕が多く、このあたりまでが木製柄に挿入されていたと推定されている。

(3) 永井原Ⅴ遺跡（第1図④）の機能

遺跡は茅ヶ岳西麓、標高710mから780m付近の斜面に位置する。南には南沢川により形成された崖があり、北は起伏の少ない緩斜面の丘陵地になっている。途中、栃沢川によって分断されるが、さらに北の湯沢川まで広大な丘陵地が続く。西麓は塩川沿いでは河岸段丘を形成しており、本遺跡は自然地形によって区切られた丘陵地の南端に位置している。

報告書には以下のように記述されている。

「溝の全長は697.6mを測り、遺構の残りが良好な場所では深さ56cm、幅100cmを測る。施設北東端で第9図のような特殊土橋部分を確認している。溝はほぼ直線的に設けられ、耕作等による撹乱を受けて一部が途切れているが、特殊土橋部分以外は連続的に続くと推定される。底面は礫の抜き取り痕以外には不規則な凹凸はなく一定の深さの溝であった。断面形はほぼ平坦な底面から垂直に立ち上がり、壁面途中から上面にかけて漏斗状に開く形をとる箇所、底面から上面にかけてそのまま垂直に立ち上がり、U字状を呈する箇所や、遺構の残りが悪い部分では皿状を呈する箇所がみられる。地山内に礫の混入はほとんどみられず溝の壁面からも礫の露出はほとんどない。一部の溝の底面からは礫を抜き取ったと思われる不定形の窪みが検出されている。特に遺構の残りが良好な箇所では底面及び壁面に地山起源の褐色土がブロック状で混入している。溝の脇に柵等の構造物の存在を示すような柱穴は確認されていない。」



第9図　永井原Ⅴ遺跡の溝と土橋（注15 - ③文献に加筆）

注目すべきは埋土中に「地山起源の褐色土がブロック状で混入している」という記載である。溝掘削時点で掘り上げた土砂を溝と並行してすぐ横に帯状に積み上げ、簡易な土手状に盛り上げて「堤」としていたとすると、溝の機能停止後、各種土砂を積み上げて築かれた堤の堆積土が徐々に溝に流れ込む。溝のブロック状の堆積とは、土塁状の盛り土の築造方法を反映した結果であったと推測できる[18]。

北東角に土橋状に掘り残された部分が直角にならず、「⌒」のような鈍角の平面をなしているのは、土橋部分の機能の特徴を反映しているとみることができる（第9図○特殊土橋図示部分）。この位置を出入口とすれば、内部の馬を管理しやすくなる。必要に応じ、馬をこの場所に追い込めば、焼印の押印や健康

チェックなどを行うことが容易になる。放牧場とは異なる馬管理機能を有した遺跡である。溝からはほとんど遺物が出土しないため遺構の時期は不明であるが、古代の遺構であることは疑いない。

これらの遺跡のほか、次のような遺跡の概要が紹介されている[19]。

(4) その他の周辺遺跡の概要

① 浅尾原Ⅵ遺跡（第１図⑧）からは、鋳造や鍛造などの燃料として必要な炭焼き土坑を含む鉄製品が出土し、馬管理に不可欠な鉄製品を製造する工房群であった。炭焼き用窯を併設しており、燃料の生産にも関与していたという。

② 上ノ原遺跡（第１図⑦）は、鰻沢川の上流に位置し、皇朝十二銭の一つ隆平永寶（延暦 15(796)年初鋳）を伴う住居址群からなる集落である。年紀のある資料では最も古く、御牧初期の工人達の居住空間であろうとされる。

③ 下大内遺跡（第１図⑤）は、南沢川中流域に位置する。年代の明確な資料では最も新しい延喜通寶（延喜七(907)年初鋳）を出土する。検出された遺構は多数の溝と土坑群である。

報告では触れられていないが、飼料などを栽培する畑地としての機能を推測しておきたい。

④ 寺前遺跡[20]（第１図⑥）は、塩川と湯沢川の合流部に位置し、遺跡群において唯一、緑釉陶器など高級食器などを出土する遺跡と伝えられている。湯沢川流域には、機能の異なる４遺跡が集中するが、本遺跡は塩川との合流部に所在する地の利によって物資、情報を集約する川津の機能を有していた可能性もある。

この様に、多様な機能を持つ遺跡群が、釜無川左岸の支流である塩川に流入する小河川(南から、南沢川、栃沢川、湯沢川、鰻沢川)毎に機能の異なる遺跡が分布している点が注目される。後世の小笠原牧との関連を指摘する見解もあるが、発掘調査資料は小笠原牧成立以前の資料が多く、対岸に推定される真衣野牧や南に地名の残る穂坂牧と関連する複合施設群と評価すべきではなかろうか[21]。

３　真衣野牧からみた御牧の構造

前章までの事実関係を踏まえ、真衣野牧の構造がいかなるものであったのか、若干の考察を試みてみたい。

(1) 宮間田遺跡の時期と牧の成立

釜無川流域の南アルプス市、北斗市、韮崎市には近年の大規模発掘調査によって奈良・平安時代の遺跡が数多く存在する。それらの発掘調査報告書は、検出された竪穴住居址ごとに詳細な遺構の検出状況や共伴遺物のデータを提供した。とりわけ、竪穴住居址に共伴する甲斐型杯の型式学的研究は甲斐国における奈良・平安時代の遺物の編年に大きく寄与した。そのような研究状況の中で、平城京左京二条四坊十一坪の井戸から出土した甲斐型杯は、甲斐国の土器編年に絶対的年代を付与することになった。すなわち、従来 9 世紀中ごろに編年されていた甲斐編年Ⅵが平城Ⅵ＝長岡京期(784 年～794 年)に相当することが判明

し、一挙に70年近くさかのぼることになったのである。この成果によれば宮間田遺跡Ⅰ期が8世紀末、Ⅱ期が9世紀前半の平安京初期、Ⅲ期が9世紀中ごろの平安京前期に相当することが判明した。すなわちⅡ期に属する「牧」銘墨書土器は、9世紀前半から中頃となり、『続日本後紀』が伝える承和二(835)年の葛原親王への甲斐国巨摩郡馬相野の下賜記事と重なることになった。宮間田Ⅰ期（長岡京期）に、馬相野にはわずか4基だが竪穴住居が設けられ、居住が始まる。その動機は不明だが、耕作するに不向きなこの地で居住が始まる点は興味深い。宮間田遺跡Ⅱ期の時期に畿内周辺では、桓武系皇族への伝統的ミヤケや墾田地の下賜が実施された。さらに、皇族薨去後に、その領有地を公的機関へ編入するという施策が始まる[22]。葛原親王への500町歩に及ぶ広大な土地の下賜は、畿内周辺での施策の実施を反映しているとみられる。例えば『日本後紀』弘仁二（811）年十月丙寅条には葛原親王に上野国利根郡長野牧が下賜されている[23]。

馬相野が御牧(真衣野牧)へと転換するのは、おそらく葛原親王の薨去に伴うもので、この土地利用の変遷もまた、一例として、畿内周辺での政策と軌を一にする。全国の御牧の成立がいつであるかはいまだ明確ではないが、少なくとも御牧・真衣野牧の成立は、葛原親王薨去の853年以降と考えたい。

(2) 宮間田および周辺遺跡の機能と展開

宮間田遺跡第Ⅱ期の遺構は竪穴住居址と掘立柱建物である。これ等が馬相野500町歩を基盤とした土地の北西部にまとまって建設され、Ⅱ期に18基、Ⅲ期に13基が利用された。500町歩にどれだけの数の馬が放牧可能かは確実ではないが、仮に1町歩（約100m四方）に1頭と計算すると、最大500頭弱放牧することが可能となる。牧子（馬子）二人で100頭の馬を管理するのが規定[24]だから、その場合最低でも10人の牧子（馬子）が必要となる。竪穴住居を牧子（馬子）が利用した施設であるとすると、各時期平均で15棟ほど所在したから、竪穴住居1棟に牧子（馬子）一人を割り当てることは可能である。

しかし、鍛冶工房などは、現在のところ、遺跡の南にも北にも、当該期の遺跡は確認できない。宮間田遺跡第Ⅲ期並行期になると対岸の梅之木遺跡が成立する。9世紀中ごろになって初めて馬具などの必需鉄製品の生産工房が検出される。

それ以前にどのような遺跡が機能したかは明確ではないが、8世紀末の隆平永寶を出土し、竪穴住居址72基、掘立柱建物11棟を検出した上ノ原遺跡（第1図⑦）などがその役割を担った可能性を考えておきたい。

9世紀第3四半期以降は、梅之木遺跡の北西部では、期間を通じて鍛冶工房が経営されていた。宮間田遺跡（真衣野牧）だけではなく、周辺の穂坂牧にも製品を供給する体制が整えられたのではなかろうか。

梅之木遺跡は、釜無川流域に所在した牧へ必要な馬具を供給する鍛冶専門の遺跡＝鍛冶工房群であった可能性も十分にある。

共伴する墨書土器の記載とその多様性に着目すると、当該遺跡が真衣野牧の鍛冶工房として設置され、鍛冶を担当した「梶」グループと、それ以外の機能を分担した「田」グループ等に分かれて作業分担した可能性を考えておきたい。墨書の目的の第一義が所属を表すという古代の官衙的施設での墨書土器の用い

方と共通点を有する。

梅之木遺跡の南から発見された永井原Ｖ遺跡の閉鎖空間は類例がないが、永井原Ｖ遺跡の機能が普遍的なものだとすると、今後、調査例が増えるにしたがって注意すべき構造となろう。

おわりにかえて

釜無川両岸域に分布する諸遺跡の分析を通して、御牧の構成要素の一部がわずかながら明らかになった。

A. 放牧地と牧子（馬子）の居住空間　　≪宮間田遺跡≫

B. 馬具製作のための鍛冶工房群　　≪梅之木遺跡≫

C. 馬管理のための人工的、小規模放牧空間　　≪永井原Ｖ遺跡≫

こうした施設群が、同一河川流域に設けられていたにもかかわらず、放牧場から距離を隔てて存在したため、遺跡ごとに実態を分析するだけで、遺跡相互を関連付けて分析することがなかった。しかし、各遺跡の経営時期を精査すると、各遺跡が、同一時期には、各遺跡の機能を補い合うように存在することが判明した。本稿ではこうした遺跡のあり方を一体のものと考えて、古代牧の構造の一端を提示した。

もちろん推定される牧に必要な要素はまだ不十分である。御牧であれば、次のような施設が不可欠である。

D. 生産馬の事務的管理施設

E. 飼葉の調達、生産空間

A～E すべての要素が揃って初めて、古代牧の全体像を提示することが可能となる。残念なことに現在入手できる資料には限りがあり、本稿では提示することができなかった。しかし、方向性は明示できたと考えている。今後、不足する情報を丹念に埋めながら、古代牧の全容解明に努めていこうと思う。

本稿は、科学研究費基盤研究（C）研究代表者吉川敏子「日本古代の畿内・近国における牧の総合的研究」（2018～2020 年度）での研究成果の一部である。本稿をなすに当たっては吉川敏子氏、清水みき氏から多くの示唆を受けた。

［注］

[1] 拙稿「古代畿内に設けられた牧　為奈野牧を探る」（『絲海』第 42 号伊丹市文化財保存協会 2017 年 6 月 30 日）

[2] 武川町教育委員会・峡北土地改良事務所『宮間田遺跡　県営圃場整備事業に伴う平安時代集落遺跡の発掘調査報告書』1988 年

[3] 甲斐型土器の編年について注 2 報告ではこのように仮定されている。しかし、その後、注５報告によって変更を余儀なくされ現在では第８図の通り修正された。本稿では基本的に第８図編年案を用いる。

[4] 『日本後紀』巻卅一逸文（『類聚国史』二八天皇避諱）弘仁十四（823）年四月壬子《二八日》条によると「壬子。改大伴宿祢、為伴宿祢。触諱也。」とあり、氏族名として淳和天皇の諱「大伴」を避けて「伴」が用いられるのは 823 年以降である。「牧」墨書土器と共伴する「伴」が氏族名を示すとすると、この点も宮間田遺跡第Ⅱ期の年代を補強することができる。

[5] 奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書平成元年度』「Ⅰ. 平城京の調査　6. 平城京左京二条四坊十一坪の調査第 180 次」1990 年

[6] 瀬田正明 「甲斐型土器の年代」（山梨県考古学協会『甲斐型土器―その編年と年代―』1992 年）
[7] 2021 年 2 月初旬、清水みき氏よりご教示いただいた。
[8] 『続日本紀』巻卅八延暦四年（785）五月丁酉《三日》「詔曰。春秋之義。祖以子貴。此則典經之垂範。古今之不易也。朕君臨四海。于茲五載。追尊之典。或猶未崇。興言念此。深以懼焉。宜追贈朕外曾祖贈從一位紀朝臣正一位太政大臣。又尊曾祖妣道氏曰太皇大夫人。仍改公姓爲朝臣。又臣子之礼。必避君諱。比者。先帝御名及朕之諱。公私觸犯。猶不忍聞。自今以後。宜並改避。於是改姓**白髮部爲眞髮部**。山部爲山。」
[9] 注 13 報告書他、平城京での甲斐型土器の発見によって並行する甲斐型土器第Ⅳ期の年代を 780 年（頃）とするが、これによって井戸 SE53 への廃棄年代は、延暦四(785)年以降となる。年代の下限については現状で有力な資料はないが、平城京出土の甲斐型杯については、十一坪の建物が機能した 9 世紀前半までとできよう。桓武の後を継いだ平城天皇は大同四(809)年 12 月に旧京・平城宮に移り、「二所朝廷」とも称される状況を生み出す。十一坪の建物群も、遅くともこの頃までに廃されたものと推測できる。
[10] 承和二(835)年の記事で、馬相野の空閑地の表記は宮間田遺跡第Ⅰ期の段階ですでに「馬」と関係のあった土地であった可能性もあるが、第Ⅰ期遺構と馬との関係を明示する考古資料は今のところない。
[11] 佐藤健太郎「駒牽の貢上数と焼印に関する一考察－『新撰年中行事』の記載を中心に―」（『史泉』102 巻 2005 年　初出）において佐藤は真衣野牧と柏崎牧の成立を弘仁式段階とする。『弘仁式』の撰進は弘仁十一(820)年で、その後さまざまな改定が加えられ、現存のものは承和七（840）年頒行後のものとされる。
[12] 注 11 佐藤論文の見解（注 11 文献 21 頁下段 9 行目から 23 頁上段 10 行目まで）によれば、『新撰年中行事』下 秋 八月　十五日　牽信濃勅旨諸牧事　において「式六十匹元八十匹」とある割注は信濃国勅旨牧(御牧)からの貢上すべき馬の数が『延喜式』では六十匹であったが、「元」は八十匹だったことを示すとし、「元」がいつのことかを問題とした。佐藤は『日本三代実録』貞観九(867)年の記事を根拠に、貞観九年以降と解釈し、これ以前の式である『弘仁式』に既に勅旨牧は規定されていたとした。事例は信濃の勅旨牧だが、同じ勅旨牧である甲斐国にも適用されるとして、真衣野牧や柏崎牧が御牧とされたのも『弘仁式』段階であるとした。『弘仁式』は遅くとも 840 年に頒行されているから、葛原親王の薨去年（853）を御牧成立時期以降とした本稿とは異なる。
[13] 『宮ノ前遺跡―韮崎市立韮崎北東小学校建設に伴う発掘調査報告書―』（韮崎市遺跡調査会・宮ノ前遺跡発掘調査団・韮崎市・韮崎市教育委員会　1992 年）第 5 章 4・５節を執筆した櫛原功―は、当該遺跡の年代観を検討する中で従来の甲斐型杯の編年に関し詳細な検討を加え、宮間田Ⅰ期に相当する宮ノ前Ⅳ期（瀬田編年Ⅵ期）を平城京左京二条四坊十一坪（平城宮Ⅵ期・長岡京期）と判断し、Ⅴ期をこれに続く 9 世紀前半とした。従うべきであろう。
[14] 注 11 佐藤論文による。
[15] ①『明野村文化財調査報告 14 梅之木遺跡Ⅰ　県営畑地帯総合整備事業にともなう平安時代遺跡の発掘調査報告』（山梨県明野村教育委員会・峡北地域振興局農務部 2002 年）②『明野村文化財調査報告 15 梅之木遺跡Ⅱ　県営畑地帯総合整備事業にともなう縄文時代・弥生時代・平安時代遺跡の発掘調査報告』（山梨県明野村教育委員会・峡北地域振興局農務部 2003 年）③『明野村文化財調査報告 16 梅之木遺跡Ⅲ・永井原Ⅴ遺跡　県営畑地帯総合整備事業にともなう平安時代遺跡の発掘調査報告』（山梨県明野村教育委員会・峡北地域振興局農務部 2004 年）
[16] 注 15③報告書第 8 表によって①・②の報告内容に修正が加えられているのでこれをもとに検討を加えた。
[17] 「仁」8 点のうち 6 点が刻書で、他と際立った違いを示すが、その理由は判然としない。
[18] 「牧格」（牧柵）と推定する意見もあるが、簡易な土塁とする方が理解しやすい。掘立柱建物を建設する場合、掘方は遺構面から下へ掘削し、遺構面下にある地層を破壊する。しかしその土砂は別所へ移動することなくすぐ横へ置いて、柱を立てた後埋め戻すのに用いる。このため掘立柱建物の掘方にはブロック状に多様な土砂の塊を認めることがしばしばある。溝の埋土に地山起源の土砂がブロック状に入る理由として大いに考えられることである。
[19] 佐野隆「小笠原牧の考古学」（入間田宣夫・谷口一夫編『牧の考古学』高志書院 2008 年）
[20] ①明野村埋蔵文化財センター「寺前遺跡調査概要」（1999 年）②明野村埋蔵文化財センター「寺前遺跡見学会資料」（2000 年）2 種類の報告には記載はなく、注 19 文献に触れられている。
[21] 拙文「近畿古代牧研究会」第 19 回研究会発表資料　甲斐国御牧に関する覚書き」（2019 年 11 月 14 日　於奈良大学）
[22] 拙稿「伊勢国北部における大安寺墾田地成立の背景」（三重大学歴史研究会『ふびと』第 54 号 2002 年）
[23] 『日本後紀』弘仁二（811）年十月丙寅《五日》条「上野国利根郡長野牧賜三品葛原親王。」
[24] 「養老厩牧令」牧毎牧条に 100 頭で 1 群とし、牧子（馬子）2 人で 1 群を飼育することが規定されている。